

空をかける翼

香枝ゆき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて地上に住んでいた人類は、空へと住みかを移す。しかし、空には先住民ヴァンパレット属がいた。

生きるため、バンパレット属と対抗するために人々は自衛組織「エンジェルガード」を創設する。

これは、エンジェルガードの隊長と、隊長に憧れて入隊した少年たちのものがたりである。

目次

君を守るマゼンダ	1
天使になりたかったわけ	6
天国のありか	11
天使なんかじゃない	15

君を守るマゼンダ

まるで草原だった。スカイナイトの新入隊員の制服は緑と決まっている。だから彼らが並ぶと春のような風景になるのだ。このような色をしているのは、初心者マークの名残という。

インナーのみ男女で分けられているのは、その昔助平な隊員が異性の更衣室へのぞきに行こうとしたからというののもつぱらの噂である。しかし、近年女子制服の色が変わったのだ。マゼンダに。

新入隊員以外はモデルチェンジはない。

「隊長、経理から、被服費のことで話があるとのことですが」
「席を外していると言ってくれ」

薄桃色の隊服と、金髪をなびかせ、役職者は颯爽と歩く。

「……一体なぜですか。布地だって貴重品なんですから」

「君は」

振り返った青い瞳が細められる。

「命よりも大事なものがあると思うか？」

——その年も、新入隊員で作られる草原が広がっていた。

「あれは？」

「特別待遇なのか？髪、珍しい金髪だし」

ひそひそ話に臆することなく、背筋をぴんとはる。

黒や茶色が多い中、生まれもつての髪色でとやかく言われることには慣れている。

けれど、隊服がマゼンダとは思わなかった。

もちろん、特注にしてくれと頼んだわけではない。

「えー諸君！入隊おめでとう。君たちは人類域を守る使命を持っている。去年は人類域が侵略され、布地の生産が減ってしまった。なかには比較的新しい中古の服や、試作品を着てもらっているものもある。不便をかけるが、この不便を町の人たちに感じさせないよう、一丸となって任務に当たっていきましょう！」

お偉方のスピーチは、盛大な拍手をもってお開きとなった。

そして、草原が刈り取られるのは、一瞬だった。

「うあつ」

「きやあつ！」

「バンパレット属の襲撃だ！」

草刈りでもしている感覚なのだろうか。ろくに戦闘訓練も受けていない新入隊員は、

次々と倒れていく。

少年少女関係なく。

翼が折れていく。

そんななかで、草原に咲くマゼンダだけが、手折られることなく立っていた。応戦しているベテラン隊員たちが目を見張る。

「……あの、新入隊員は？」

「入団試験トップの子です。まさか、教えずとも太刀打ちできているなんて……」
違う。

手加減をされている。

この、バンパレット属の少年に。

「おまえ、女の子か？」

かつとなる。

「答える必要はない！」

「おっと」

小さなバンパレット属はひよいと攻撃を避ける。

遊んでいるように。

「おまえにいいこと教えてやるよ。バンパレット属の女の子は、桃色のものを身につけ

るんだ。環境破壊と、住みかを追われたことで、ヴァンパレット属の女の子はほとんどいない。大事にされてるんだぜ？だからおまえがその服を着てる限り、緑のやつらみたいにぼこぼこにされなくて済むかもな」

「ばかにするな！」

「事実だろ」

攻撃が羽を散らす。

「守りたいものを守れないんなら、守ってくださいって敵に慈悲を請うてみる。鬼じゃないんだ。見逃すくらいはしてやるさ」

空に落ちる。

笑い顔が遠退いていく。

悔しい。

悔しい。

けどまだ守れないから。

守る力がないから。絶対に忘れない。

この悔しさを意識するために、私はマゼンダを身に纏おう。

そして、この情報を然るべき人らに伝え、誰かが守られるようにしてもらおう。

もしも全滅するような事態になろうとも、この色が守ってくれるなら、全員助からないなら、誰かは助かれ。

「……覚えていろ！バンパレット属」

「レオンだ。この名前、忘れるな」

レオンとバンパレット属の一団は、空の彼方へと姿を消した。

天使になりたかったわけ

「ありがとうございます。失礼します」

丁重に扉をしめ、ほうと息をつく。

入隊の場は襲撃でぶち壊されたが、バンパレット属が撤退したあともやるべきことは残っていた。

軽傷者を中心に、負傷者の確認、治療。

警戒強化に、今後の流れについての大まかな説明。

加えて、自身はバンパレット属と互角に戦った新入隊員という見方をされ、簡単な状況説明。

いろいろなことがありすぎた。

だから気を抜いていたのかもしれない

「おっつかつれちゃーんー！」

緑のインナーシャツに包帯をぐるぐるまきにした誰かがばふりと追突してくる。

思わず一、二歩よろめいてしまう。

無言で振り返ると、ここでは珍しくない、茶髪と同じ色の瞳があった。

「え、あれ？上官？違うよね？俺はみてのとおり、さっきの入隊式にいた新人だけどため息をつく。」

人懐っこいというか、遠慮がないというか。

怒る気も失せた。

「うん、同期だよ」

大柄な体は、他の新入隊員よりも頭ひとつ飛び抜けていた。

「やったー！俺、シヨウっていうんだ。11歳。そっちは？」

「ミノリ。同い年」

「よかったー！俺、遠くからきたからこっちに知り合いなくてさ、いろいろ教えてくれよな」

「あいにくだが、その期待にはこたえられないよ。私も

遠くからきたから」

出身地を口にする、シヨウは目に見えて驚いていた。

「うーわー、俺より遠いところから来たんだな。飛行船で何日かかるんだよ」

答えるより前に、会議室の扉が開く。

私たちは柱の影に隠れた。

新米のエンジェルガードが制服を返し、泣きながら頭を下げている。

そして、年かきの女性に連れられながらその場を去った。

「あれは……」

「入隊早々やめたんだろ。あれで五人目らしいけど」

「なっ……!」

まだ一日も経っていない。それなのにやめるなんて。

「無理もないっしょ、入隊式でいきなりあんなふうにはバンパレットに襲われたんだから。死人がでなかったのが奇跡だってお偉いさんも言ってた」

「……だとしても、平和を守るのがエンジェルガードの仕事のはずなのに」

「覚悟ができてるか、そうでないかの違いでしょ」

シヨウはゆっくりと歩きだす。私はそれについていく。

「俺、早めに会場ついたんだ。みてのとおりでかいから、みんなこわがって友達はできなかったけど、大体の事情はわかった」

「……?」

「俺やミノリは、家から通えないからエンジェルガードの寮に入るでしょ?でも、通える範囲でも新入りのうちは寮に入れるんだ」

「……それで?」

「ごはんが食べられる。これは心惹かれるでしょ」

顔がかつと熱くなる。

「食事に釣られて入隊するとも……！」

「ミノリはさ」

声が少しだけ低くなる。

「育ちが良さそうだから、もしかしたら知らないかもしれないけれど」

心がずきりとする。

「俺が住んでた町は、いつも食べるものに困ってたよ」

シヨウは大柄だった。けれど、顔にはたくさんのニキビのあとがついていた。

「俺しか試験に受からなかったけど、でも、町には11歳に早くなりたがってるやつらが

たくさんいた」

11歳。

エンジェルガードへの入隊可能な年齢だ。

「もちろん、誰かの役に立ちたい、守りたいって思いは、みんな持つてると思うよ。けど、エンジェルガードに入らないと生きていけないやつも、たくさんいると思う」

窓からは、さきほどの新入隊員がとぼとぼ歩いていくのが見える。

「たとえ向いてなかったとしてもさ」

夕日が沈んでいく。

影が長くなっていった。

天国のありか

「ミノリ、起きてるかー!？」

階下からは声変わり前のルームメイトが呼び掛けている。

元気はつらつすぎる声は、聞いていて安心感がある。

若干うるさいと言えなくもないけれど。

「聞こえてるよ、あと、もう起きてる」

私が黒のアンダーシャツ姿で顔を見せると、シヨウはすでに制服に着替えていた。

「それにしても早いな」

「やりたいことも覚えなきやいけないこともたくさんあるしな！ミノリ、朝飯前に町のようす見に行こうぜ」

土地勘のない場所で、早く地形を覚えるに越したことはない。

地図よりも実際に歩くほうがためになる。

「いいと思うけど、新入隊員が勝手な真似は……」

「外出許可は昨日のうちに二人分もらってきた！遠くまでじゃなければいいってさ」
やるのが早い。

となると、私の心配は杞憂に終わりそうだ。

「じゃあ、行こうか。待って、ジャケットはおるから」

用意を済ませ、ロフトから降りる。桃色の服に、シヨウは首を捻っていた。

「あれ、ミノリ、アンダーも他のみんなと色違うのな」

「みたいだね」

大多数は、濃い緑だ。

「でも、物資不足なら仕方ないよ」

「まあな」

部屋の扉をしめ、寮を出る。

見上げると、薄い青空が広がっていた。

「いい天気だな」

「ほんとに。散策にぴったりだ」

平和で、温かくて。

穏やかな場所だった。

街は賑やかで、店にはそれなりに品物がそろっている。

人々の服は質素ではあるもののみられるものであるし、子供の姿もある。

「まあまあ恵まれてるよな、ここ」

シヨウの感想は間違っではないだろう。

贅沢をしている人間でなければ、ここは天国と思うに違いない。

「そうだな。きつと、エンジェルガード本部がある街だから」

地上から運ばれる活用可能な資材は、人々の暮らしを守るエンジェルガードが率先してサルベージしている。

よって、回収物はエンジェルガードがまず活用する。

充足したものは付近の市場に出回るのだ。

物資は常に不足しているから、遠方の町まではなかなかまわらない。届けようにも途中で消費されてしまう。

「……生まれてくる場所は、選べないしな」

なにも言えなかった。

この世界には確かに、格差が存在しているから。

「つと、そろそろ時間かな」

シヨウはくるりと背を向ける。

表情は見えない。

「帰ろっか」

背中はまだ一つの答え以外、拒絶しているように見えた。

「うん、帰ろう」

そうして私たちは、守るべき街や人々から、目をそらしたのだ。
私たちはエンジェルガード。

街や人々を守るべき第一線の実行部隊。

それ以前に一人の人間として、自身の心を守るために。

天使なんかじゃない

エンジェルガードの仕事は多岐にわたる。護衛、戦闘、人助け。物質運搬に救護活動。「つたく、覚えることたくさんありすぎるよなー！」

盛りだくさんの内容は、仕事をしながら覚えるスタイルだ。

ノートをとる暇なんかはない。むしろ、一つ仕事が終わるか終わらないかのうちに次の仕事が入ってくるのだ。

今日もくたくたになって部屋へと帰りつく。

シヨウは早速ジャケットをほうり投げていた。

「ほら、しわになるからかけたほうがいいよ」

差し出したハンガーを、シヨウは寝転びながら受け取った。

「さんきゅ」

受け取りつつも、シヨウは服をかける気配がない。

「まったく、ものぐさだなあ」

「ミノリがきつちりしすぎなんだよ」

口をとがらせる姿は、同じ年のはずなのに弟のように思えてくるから不思議だ。

「基本がでなければなにかあったときも対応できないよ。平穏なときこそ日常的にできてることをしないと」

「真面目」

「うるさい不真面目」

同室のショウは、性格や体格、なにもかも違う。

それでも仲良く接しているという自覚はあった。

金髪碧眼という、このあたりでほとんどいない容姿についても、同期の中では唯一何もいってこない。

「俺は省エネ型なの」

「ああ言えばこういうんだから」

笑いあっていたそのとき。

警報がなった。

「なんだ？ 訓練警報？」

「いや、多分違う」

廊下をばたばたと走る足音がする。

「エンジェルガード、総員戦闘準備！ ヴァンパレットが街に現れた！ エンジェルガード、総員戦闘準備！」

ばさつとジャケットをつかみ、あつという間にはおる。

「ほらな、かけなくてよかっただろ？」

ミノリは黙ってハンガーからジャケットをひったくった。

錬度の浅いミノリたちは、後方部隊を言い渡された。

妥当な判断ではある。

前線は経験豊富なエンジェルガードが、殿は、前線には劣るものの、ミノリたちよりも経験があるエンジェルガードが固めている。

「私たちの役割は、前線を潜り抜けてきた手負いの始末と、急を要しない民間人の救助つてところか」

ミノリのつぶやきに、シヨウは武器を握り直す。

「にしても、襲撃、多いよな。仮にもお膝元だぜ？」

「それは思う、が」

マゼンタが残像を残す。

ヴァンパレットがどさりと倒れる。

「話は後だ」

シヨウは返事をする前に、別のヴァンパレットの攻撃を受け止め、カウンターを仕掛けて仕留める。

「確かに、落ち着いて話せねえや」

争いはまだ止む気配がない。

民間人を瓦礫から救いだし、ヴァンパレットの攻撃を防ぎ、そんな姿は英雄的なのかもしれない。

しかし。

一人の同期が倒れた。

ミノリがさかさず犯人を打ち倒す。

「天使なんかじゃねえな、俺たち」

相手をちからに任せて制圧することにかわりはない。

「だけど、それでいいよ、俺たちは」

意識を失った仲間を横たえ、シヨウは地を蹴った。